

「大龍」について ③

「龍」は中国で誕生した神話上の生き物である(図1)。戦国時代から漢代にかけて編纂・記述された『管子』の中に、「龍は水から生ず」と記されている。また同じ頃にまとめられた『春秋左氏伝』にも、「龍は水物なり」と記されている。このように、中国では、古より「龍は水を招き寄せ、大雨や洪水をもたらす生き物」と考えられてきた。



図1. 竜圖。葛飾北斎画 (Wikimedia Commons より)。

たとえば、黄河で起きる洪水や旱魃に対し、黄河の「龍神」である「河伯」に牛馬を生贄として捧げていたという、祈願伝説からも窺い知ることができる。その黄河の「龍神」は、勢いよく落下する瀑布の中を、人知れず遡上する中国の「蛟龍」という「水神」で、

これが“瀧”の字源になっているのではないかと考える。

いずれにおいても、中国の神話に登場する天の四方を司る「四神」の一つ、「青龍」が高松塚古墳やキトラ古墳の内部壁面に描かれているように、「龍」は、日本においても古来より神性で畏怖の対象だった。

「龍神」

『万葉集』巻二の相聞歌に、天武天皇とその夫人である藤原夫人(藤原鎌足の娘)との唱和歌が記されている。飛鳥宮にいる天武天皇が大原の里にいる藤原夫人に、「そちらは田舎なので、雪が降るのはもう少し後になってからだね」との歌を送ると、夫人は「飛鳥宮に降ったのは、私が『おかみ』である神に頼んで降らせた雪の“かけら”ですよ」との歌でお返ししたという。この「おかみ」は「龍神」のことで、藤原氏が「水神」として祀る「龍神」だとされている。

奈良時代に記された「龍神信仰」の最古の事例と考えられ、この時代にすでに水を司る「龍神信仰」が国内に広まっていたことを示唆している。

当時から、「水神」は「龍神」と同義、と考えられていたようである。『日本書紀』では「水神」は「罔象女神」、『古事記』では「弥都波能売神」と称され、また「龍神」、「高龍神」とも称されていた。

日本では、古来より自然物に対する信仰心が根強くあり、朝廷は律令制を敷くなかで、その信仰心をうまく利用しながら、諸神への祈願を朝廷の中心的行事として執りおこなってきた。そして朝廷より特別の処遇を受け、奉幣を受けられる神社として「二十二社」を選定した。そのうちの伊勢神宮を除く21社は畿内に鎮座する神社である。旧官幣大社で奥吉野に鎮座する「丹生川上神社」も、その中に含まれている。

この神社には「水神」「龍神」が祀られており、現在、上社・中社・下社に分かれている。上社(川上村、図2)の祭神とし

て「高龍神」が、中社(東吉野村)は「罔象女神」が、下社(下市町)は「閻龍神」が祀られている。同じように、京都の貴船神社でも「高龍神」「閻龍神」が祀られている。「大龍」への祈り



図2. “龍”の口から水が出る丹生川神社上社の手水舎。

大和盆地では、古墳時代にはすでに、青垣山麓を中心に水稲栽培が一般的になっていた。畑のような乾燥した場所で栽培される陸稲とは異なり、水稲は湛水した水田で育成される。そのため、田植えの時期には、大量の水が必要とされる。

ところが、もともと大和盆地には安定した水量を保持できる川はなく、日照りが続いて雨が降らなければ旱魃になり、逆に長雨が続きと川は氾濫して家々は冠水していた。天候によってその年の降雨量は極端に異なるなど、大和盆地の農業は、どちらかといえば、水田稲作には不向きな地域だった。

しかし、藤原京・平城京の都が当該地に造営されたことから、関連する多くの人々を養うための食糧の確保は、必要条件となった。ところが、上述したように、大和盆地は水田稲作に欠かすことができない安定的水量確保が難しかったことから、貯水方法として考案されたのが「ため池」だった。ちなみに、奈良時代には行基が、平安時代には空海が、国内各地のため池の築造・補修に尽力したという。

それでも、降雨が極端に少なく、ため池の貯水量が底をつくようになれば「祈雨」の祈願を、また逆に大雨・長雨による氾濫が起きる状況になれば、「止雨」を願うのは当然の思考である。とくに水不足は死活問題であり、「水神」への祈願は切実である。その祈願の先にあったのが、「龍神」への祈り・信仰である。それはまさに、「大龍」とされる「くにとこたちのみこと」への祈りでもある。

『天理教教典』には、「この世の元の神・実の神は、月日親神であつて、月様を、くにとこたちのみこと」と称える(第三章 元の理)とある。そして、「くにとこたちのみこと 人間身の内の眼うるおい、世界では水の守護の理。」(第四章 天理王命)とあるように、「十全の守護の理」について神名を配して説き分けられている。

私たちの身の内の水分量は、胎児で約90%、新生児で約80%、子どもで約70%、そして成人で60~65%とされている。このように体内には大量の水分が含まれているにもかかわらず、普段はそのことを実感することはない。せいぜい、滲み出てきた汗や出血として認識はできるが、立体的・容積的に見ることはない。それができるのは、眼を潤している涙の水滴が出てきた時ぐらいである。

その水滴も、「ため池」の水も、「十全の守護」の恩恵を受けていることを、私たちは決して忘れてはならない。